

在村文化にみる風雅交流と風雅公共圏

——畔上高魯・栗庵似鳩・大野景山・大原幽学を中心に——

杉 仁

はじめに——公共の場と風雅公共圏——

人と文化と公共圏 始原以来、生命存在としての人は、生への自発性と個別欲求をもつが、相互依存なしには生きられない。人との関係を求め、個別欲求に共存欲求を、自発性に協調性をあわせ、人と協調し共存しあう関係の場で生きる。

関係は、生命に必要な生産（生活資料の生産および生命の生産再生産）（産Ⅱ生産・育児・家事・生活・教育ほか）のあり方で変化する。変化は時代を画し、関係は、家族く同族く村落く地域から、民族く国家く国際間におよぶ。

人と人が出会えば、身振りや振る舞い、表情や音声で、感情や意志、意味や価値をあらわし、共存すべき生命存

在として、たがいを認め合う。うちとければ、その場にはない仲間もふくめ、複数の個別が互いを認め合う信用の場をかもしだす。

成員すべてが、暗黙のうちに了解し合える意味と価値と信用を共有する関係の場、一種「公共の場」である。

一定の地域をなせば、「公共圏」ともよべる。

意味と価値と信用を表現する行為と所産を「文化」とよぶとすれば、人は始原以来、生産再生産にねざす「関係」のなかで、「文化」と「公共圏」を成して生きてきたことになる。^①

近世文化と風雅公共圏 近世まで、「文化」の語はない。学問く文芸く芸能などせまい意味での「文化」は、「風雅」あるいは「風流く学文く好學く文事く好事」などとよば

れた。一括「風雅文化」とよべる。

いまいう專業の文化人は少ない。多くが生業と風雅を表裏一体、一身に担う。都市では、御用町人が担い手の中心で、近世初期、一七世紀初頭からさかんだった。在农村では、村役豪農商層が担い手の中心で、畿内西国では一七世紀前半から、東国でも一八世紀半ばまでには、山の奥々津々浦々までひろがった。

これら文化のひろがりの基底には、地域で生命がつねに危険にさらされた戦国期の克服、および太平の世の意識がある。山の奥々津々浦々まで在农村文化を楽しむ地域の姿を、泰平の証とみなす論は少なくない。

これら農山漁村にゆきわたった文化活動、「風雅文化」「生産文化」「生活文化」をあわせた活動を「在农村文化」、担い手をひろく「在农村文人」⁽³⁾とよんできた。

風雅文化は、つねに仲間と「座」を組んでおこなわれる。表の公的な身分をはなれ、裏の私的な雅号のみによる、一種対等な関係で交流しあう⁽⁴⁾。

縁戚く友人く村民や村役く生業く流通など、地域日常の「仲間」はもちろん、どこでも、だれとでも、見知らぬ旅人や行商人、行き倒れ人であっても、おなじ風雅

の人でさえあれば、直ちに交流しあった。

風雅人の出会いは、ただちに風雅を共有する場、「風雅公共の場」をなす⁽⁵⁾。

風雅交流の特徴は、これまでみてきた。まとめておこう。第一、実名をはなれ雅号で交流する一種対等な雅号世界をなす(①対等性く超身分性)。第二、風雅にかかわるもの誰とでも親密に交流する(②親密性)。第三、生業・流通・村役公務もふくめ、人と人とが出会いさえすれば直ちに交流する(③出会い性)。第四、風雅交流でつちかした信用(風雅信用)が、現実世界の商取引や村役公務の信用(取引信用・政治信用)と表裏一体をなす(④信用保証性)、第五、陸路・川路・海路を問わず、交通路さえあればどここの地とも交流する(⑤超地域性)。第六、村域はもちろん、郡域・国域・藩域など支配領域をこえて交流する(⑥超政治性)、となる。

こうした伸縮自在、開かれた風雅人同士の親密な風雅交流が日常のおこなわれる一定の地域、とくに表の村役く生業く流通など公的な実名の現実世界と、裏の私的な雅号による風雅世界とが表裏一体^(表裏一体)、支え合って活動するほど、郡規模の地域を、「風雅公共圏」と呼んでみ

た。⁽⁶⁾

ここでは、とくに地域を限定せず、地域をこえた遊歴者のさまざまな風雅の出会いと交流、少人数の「風雅公共の場」をみる。多人数が一定地域をなして交流する「風雅公共圏」については、さきに概観した上州全域(注6)および武州多摩郡・羽州村山郡(注7)もふくめ、別考したい。

1 風雅交流の対等性、超身分制

—— 信州中野 畔上高魯にみる ——

近世初頭にみる対等性く超身分性 まず①「対等性く超身分性」をみよう。実名をはなれ身分もこえて交流する、一種対等な風雅交流である。

風雅人当然の暗黙の了解であり、あらためて書き記すこと稀であるが、近世初頭でたとえば、よく使われる『北野大茶湯之記』(豊原秀吉、一五七七年、正十五年十月一日記録)がある。

「一茶湯執心(釣瓶)においては、また若党町人百姓以下によらず、釜一、つるへ一、呑物一、…こがしにても不苦候間、提来可仕候事」とする。「茶湯執心」であれば、若党町人百姓以下の身分も、道具や茶材の高下も問わない、

との命令である。

『南方録』南坊宗啓(文禄二年)は、「小座敷の会、賞客と云は、貴賤によらず、申入れたる人を上客とあしらふなり。平生の高下によらず、貴賤一同、…尊かりしなり」とする。小座敷の茶室世界では、日常世界での貴賤高下を問わないというのである。こうした風雅交流の身分を問わない特徴は、「風雅公共の場」あるいは「風雅公共圏」と呼ぶにふさわしい。⁽⁷⁾

もちろん最上層では、華麗な茶室に権威と権力と巨富をほこり、目立たぬところに粋をつくして富裕をほこること多かつたとされるが、原理としての対等性く超身分性は、むしろ一般の風雅人や一般中下層にひろがる観をみせる。そのほかの特徴もおなじであろう。

近世後期の在村史料で見てもよう。

近世後期在村にみる風雅の対等性 ①「対等性く超身分性」を明記した史料として、信州中野代官所膝下、山田松斎の「中野村逸作行状申上」二通(文政四年)が興味ふかい。⁽⁸⁾

「逸作」は、中野村の旧上杉家臣高梨氏の旧臣地侍系を称する在村漢詩人「畔上逸作」で号「高魯」。自尊心のたかい独立不羈風の人物だった⁽⁹⁾。そうした振る舞いに代

官所が監視をつよめたのか、文人仲間の「山田松齋」(東江部大地主兼農商文人)に問い糺した。そのときの申上書二通である。

第一通「御尋二付」(文政四年)をみよう。逸作は古い草屋に住み、中野市場で小商も兼ねるが、小百姓で生産は低い…。貧に甘んじ節儉を旨とし、性来廉直で篤実、信を重ずる人物である…。若年から「文字之道を好、勤て読書など」しており、逸作より身元豊かな「知己の信友両三人」⁽¹⁰⁾にも、「少も諂(つひ)ひをくする事無(臆)き人柄だと称える。善光寺平の在村にひろがる文人交際の一端がうかがえる。

第二通「別控／松齋と懇者成しわけ」(文政四年)は、こうである。「無心何心」は「無心何心」で「心」は「何心なく」「なにげなく」の意か。

(前略)漸当春年始二十足にて立よりが初候也、…只亭主古之道したハれ候哉、私式ノ小民ニ而も無心何心友ハ様被思、折々立より被申候を、私ハ一向不參候へ共、其レも少も心ニかけ□ハれず、いつも替る事無キハ是のミ嬉しく候。一体書物なと好ミ候ハ、付合大小高下無差別ものと存、只々清潔(きよま)く、身程ヲ弁、不羨人財、貪心なく、他の財さへ当て不致候へハ、貧賤何恥る事あらん、身上宜キ人として何憚る事可有哉。…扱ケ様ハ申ものゝ、書籍斗ハ時折借用可申候

などあらく敷申候、爾来至今日一錢之無心も申たる事決て無之…。／辛巳(文政四年)十月廿日／松齋

逸作との付き合いはまだ浅く、私松齋を訪ねて昵懇になつたのは今春からだだが、古(いにしへ)の道を学んでいるからであろう、私如きにも、「心友」のように何気なく接してくれる。無沙汰をしても気にかげず、いつもおなじ態度で接してくれるのがうれしい…。

「古の道」の学びと「心友」としての親密感が、善光寺平にひろがる文人交際で、一つ重んじられていたことになる。地域在村の文人観の一端とみてよかろう。

さらにつづけて、私松齋が思うに「書物好みは大小高下無差別」、書物好みの文人の付合いは、大小高下なく無差別なのが当たり前なのである…。行い正しく、身の程わきまえ、人の財を羨まず当てにもしなければ、なんぞ貧賤を恥じ、富裕者を憚ることあろう…。

そうはいっても逸作は書物好みゆえ、「書籍斗ハ時折借用可申候」など軽きうことはあるが、金の無心などに至るもしたことがない…。身分高下や貧富差に無頓着、いつも堂々としている気位の高さは見上げたもので、代官所が目をつけるべき人物ではないとの弁護論である。

日常暗黙の了解である風雅交流の対等性、超身分性が、代官所に糺された文人仲間の弁護ではからずも文字にあらわれたわけだが、在村文人の交際の仕方や率直な文人観もあわせて読みとることができる。

こうした「大小高下無差別」を当然とする風雅交流の場が、信州善光寺平にもひろがっていたのである。俳人「一茶」の晩年の門人圏でもあり、後述の武州荏原郡大井村の名主文人「大野景山」も、石村の「白齋」と興味ふかい交流をしている。

北信の「風雅公共の場」あるいは「風雅公共圏」と呼ぶにふさわしい。⁽¹²⁾

2 風雅交流の出会い性と親密性

——上州の行き倒れ人「似鳩」の風雅交流——

風雅交流の出会い性と親密性 ついで、人と人が出会いさえすれば直ちに交流がはじまる②「出会い性」、風雅にかかわるもの誰とでも親密に交流する③「親密性」をみよう。行き倒れ人でも出会えば助け、風雅さえあれば親密に交流、力量をみとめれば師に仰ぐことさえ当然とし

た事例がある（以下一部は、（拙著⑤））。

上州蓮沼村に、地域宗匠「栗庵似鳩」（元文元年）がいた。大阪生まれの玉置氏、業俳をころざして江戸へ出たが食いつめ、明和八年三十六才の晩秋、帰郷の旅で中山道をたどった。俳諧一つを元手に、一宿一飯を乞うては次の紹介者へ渡り歩く、文字どおり「乞食」（こつじき）の旅であった。

空腹のまま武州熊谷から渡船で利根川をようやく渡り、上州へ入ったところで、夜中の深雪の道に倒れた。かつて親しかった僧侶俳人「松谷」の住寺、長沼村観音寺へ向かう途中だったという。

芭蕉はじめ、業俳だれでも一度は覚悟する貧と侘の道とはいえ、実際の行き倒れは稀だったにちがいない。

救ったのは蓮沼村の豪農商人「高柳勘太夫」。食を与え、邸内の栗の木脇の小屋に住ませた。まもなく迎えた明和九年、観音寺の新年句会に連れられて詠んだ二句、「世につるゝ師走の音や水車」と「蝶鳥のこゝろはしらす花の春」を見て地域俳人連が驚嘆、宗匠として永住をすよく願った。

栗の木脇の小屋がそのまま庵となり、庵号「栗庵」を名乗ることにした。清貧無欲、ひたすら芭蕉の「わ

びさび」に忠実な人として信頼され、弟子はふえつづけた。

行き倒れ人「似鳩」は、地域宗匠に生まれかわったのである（伊勢崎市史資料編）。のち日記（寛政八）に、「今は二十六年のむかし、辛卯歳霜月廿三日の夜（明和）、先の旧庵にやどかりてより、年々歳々誕生日として、此日を祝ふもおかしからずや」と記す（東庵似鳩日記）。

まさにあらたな地域宗匠の誕生であった。

ところが、頼りにしていた「松谷」が、翌々年安永三年の暮れ、「齡三十八歳にて卒」した。似鳩とほぼ同年令だったか。すでに地元の有名人連から信頼を得ていたのであろう、似鳩が松谷追善『有無の日集』の編集をまかされ、住みついた似鳩の最初の大事業となった。

安永四年刊行、冒頭の似鳩撰「凡例」をみよう。

一、此集ハ専ら松谷子か追福ながら、悼の句を不 requesterハ、湖東の五老井か、追悼の句ハ見るも物憂といへる骨髄伝の詞にならひ、松子か言残せる句に諸君子の次韻を乞、六句の表合四十余章、是又文章か俳諧陀羅尼といへる語に随ひ侍る

芭蕉高弟の一人「五老井」森川許六の言をとり、物憂いだけ

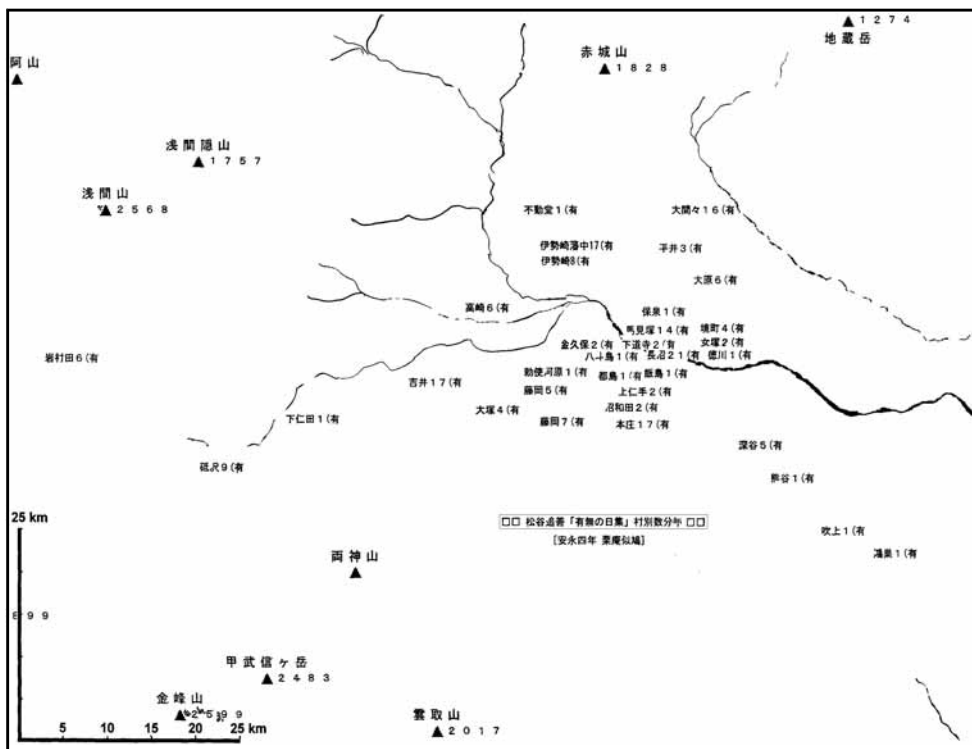
の追悼句ではなく、松谷句を発句とする連歌「六句の表合」を募る、というのである（「追福の句ハ見るも物憂」は許六「歴代神髄伝」跋の、事。『蕪草』「いとむし」の師の語で「追善の集なし」のこと）。松谷・似鳩ともに明朗闊達、かつ個性豊かな人だったことをうかがわせる。

「表合」は、百韻の表八句または歌仙の表六句だけで終えるもので、ここでは表六句。「表の内」に一巻の姿を込「める凝縮した形とされる（去来「旅」跋論）」。松谷追悼にふさわしいと考えたのであろう。

下道寺村「河舟」跋文も、「似鳩師、追福のすゝをとりて魁珠となり、…遺艸を取て発句となし、同志に募て爾莫の高筆を苜集れハ、二巻の冊子と成はべりぬ」とする。

その上で、「そもくこの誉れや、一に似鳩子のつとめにあり」と記す。居ついたばかりの似鳩に托した編集が、地域で高く評価されていたことをしめす。

門人たちは、地域仲間数人く十数人で巻いた表六句に、ほかのものの小発句集「名録」をあわせる形で応募した。利根川をはさむ上州く武州の近隣地はもちろん、南は甲州の郡内や市川大門から藤田へ、西は信州の岩村田や小諸から上田へ、松本から郷原や上諏訪へ、北は越後高田や柏崎、東は野州（下野師）をへて常州（常陸）の額田や鉾田へ



ひろがる。とおく越中く越前く加賀、駿河く三河く尾張く伊勢く京からもよせられた。(『有無の日集』参加者分布図)(上州武州のみ) 参照

「似鳩」の名は、亡き松谷の追善集を編集したおかげで、一躍関東一円からひろく全国に知れわたったのである。

松谷わかき頃、ともに励んだ「關更」(二夜庵半化庵)は、死去を聞いて「魂かへれ、魂かへりたまえ…」と嘆いたと記す(拙著『追善』)。追悼句の最末尾は、似鳩句「雪の夜や誰か宿を守る犬の声」と、關更句「おなし色をかさねくく雪の山」がならぶ。

似鳩の出会った利根川河岸地帯の文人たち さて、似鳩が庵を得た蓮沼村は利根川から半里弱。「利根川十四河岸」にちかい。公認された河岸そのものは十四ヶ所だが、一々数軒の河岸問屋が村役をかね、倉庫と川船をもつて一大流通拠点をなす。船頭や水主を雇い、旅人向けの茶屋や旅籠もいとなむ。船曳き賃稼ぎも、近隣村からあつま

る。文人墨客の往来や逗留も多く、みずからも文人として活動する。河岸問屋文人とよべる。全体として地域の文

化センターの役割も果たした。

近隣村をあわせ、「利根川河岸地帯」とよぶべき一大地域圏をなしていたのである。⁽¹³⁾

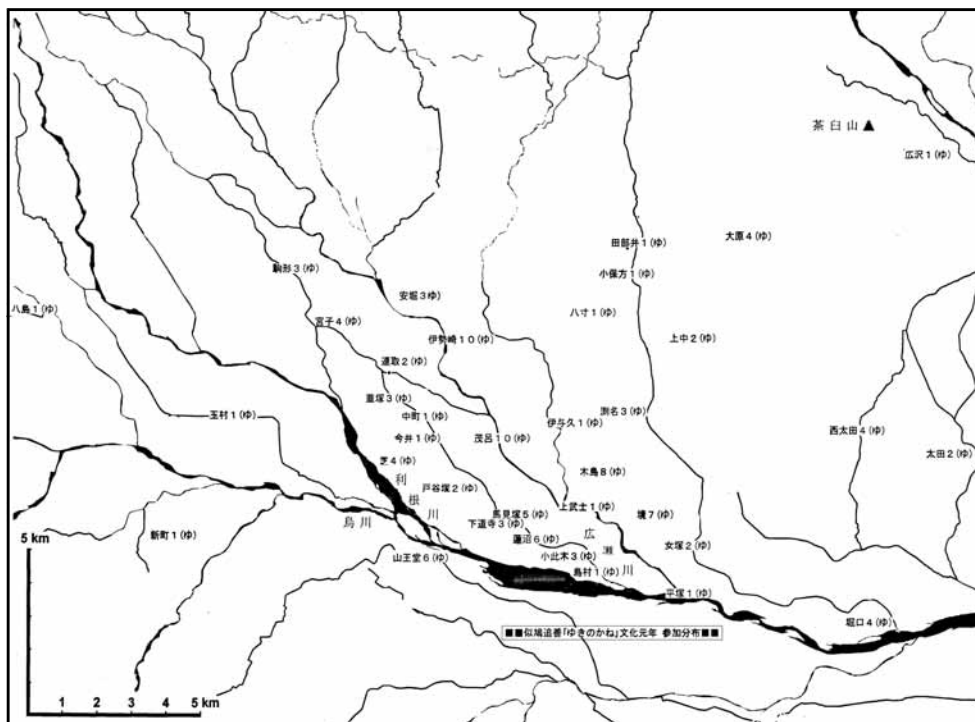
さきの松谷追善『有無の日集』**①**に参加した地域俳人連も、長沼21人、馬見塚14人ほか、不動堂、勅使河原(州^武)、八斗島河岸(州^上)、上仁手(州^武)など、利根川河岸地帯にひろがる。『有無の日集』刊行は、「利根川河岸地帯」あげての大事業、だったのである。

似鳩は、この地に来遊するきつかけとなった友「松谷」を失ったわけだが、その門下をひきつづ形になったのであろう、門人が急増した。

似鳩門人分布を、のちの似鳩七回忌追善『ゆきのかね』(文化元^{元年六月})**②**でみると、山王堂河岸(州^武)6、平塚河岸(州^上)1のほか、蓮沼6、馬見塚5、下道寺3(州^武)、島村(州^上)1など、利根川河岸地帯の北岸にひろがる。松谷追善『有無の日集』の参加者分布の北岸、上州側とほとんどかさなる。(似鳩追善『ゆきのかね』文化元年参加者分布)参照。⁽¹⁴⁾

南北両岸にまたがるようすは、『春興／上毛栗庵』(安永^{五年})**③**の眉年序が、こう記す。

利根の兩岸にわかれて、河北に栗庵の詞友有、河南



にも其好士（隠）すくなからず、興に乗ずる時は南北に涉りてむつびをなす、ひと日友かきうちつとひて春のすさみをうとふ（歌）、なを鶯のあした、かハすのゆふへ、其さまく（歌）なる風骨を遠近にもとめて、さくら木にする…。
『伊勢崎市史』資料編近世3「文化」
（一六四、肩年は武州上仁井村の人）

利根川北岸の上州側と南岸の武州側との双方で、季節ごとに往き来して句会で親睦をふかめてきた。このたび、それらの句を集めて出版する、との意である。

『春興』③の参加村全38カ村をみると、北岸の上州では、似鳩の住む蓮沼村はじめ、八斗島河岸をふくむ近隣の村々が26カ村、南岸の武州では、三友河岸および八町河岸をふくむ10カ村（うち2カ村は上州にも同名）がみえる。とおく信州4カ村、常州1カ村、越後1カ村からも寄せている。

①②③をあわせると、利根川南北の上州武州の在村俳人連は、東は野州から常州、西は信州、北は越後、南は甲州まで、国境をこえた風雅交流で、親睦をふかめていたことになる。大河も国境もこえて交流する、これも風雅世界の特徴、⑤超地域性の一例といえよう。

河岸地帯では、上流く下流の河岸問屋同士の結合がつよい。生業で欠かせない船荷情報、宿泊や乗船の遊歴史文

人ほかの乗客情報、仲間外のあらたな割り込みをふせぎ既得権をまもりあう訴訟活動、問屋仲間の結束を高める俳諧交流等々が一体となり、河岸沿いに細長くつらなつて一定地域をなす。

また河岸それぞれは、後背地をもつ。地形と道筋に応じてひろがる。馬荷で集荷される多くの農村商品が河岸の繁栄をささえるとともに、下流から上がってくる返り荷の干鰯肥料などの需要先ともなる。河岸と後背地とのむすびつきは強く、峠を越えて思わぬ遠くともつながる。後背地の在村俳人との風雅交流も少くない。

河岸地帯の積荷と風雅一体の交流圏は、両沿岸につらなる河岸同士の直線状のひろがり、各河岸ごとに後背地をむすぶ楢円状のひろがり、後背地奥の峠道をこえた点状のひろがり、これら三つがからみあつて独特な形をなす（後述）。

後背地の奥の峠道はたとえば、西上州山中奥深い南牧谷の特産に、砥沢村の幕府御用砥石がある。馬荷で溪口の下仁田の砥石問屋へ、さらに舟荷として鐙川河岸から烏川河岸をへて、利根川河岸で大形船に積み換えられ、江戸砥石問屋へ送られるが、この流通路がそのまま俳諧

の風雅交流路となる。

砥沢村の芭蕉碑「蟬塚」の建立記念集『蟬乃声』安永二年闌更序（半化坊 夜半庵 金沢高桑 氏のうち天明中興の五傑）をみると、全42ヶ村118名中、河岸または河岸を外濤とする村の参加者は、砥沢18のほか、下仁田4、長沼9、藤丘8、金久6、吉井5、伊勢2、沼和田2、新戒2、玉村1、上仁手1、勅使河原1の10ヶ所60人弱にのぼるが、いずれも鐺川沿いに細長く、ほぼ一直線につらなる（分布図も）。

南牧谷から峠をこえた信州からも、高埜町5、塩尻4、小諸1、坂城1、岩村田1、五ヶ村12名が参加する。塩尻4、坂城1は、毎年峠道を往復する蚕種行商俳人、高埜町（宿場市場町（如 山下町宿場市場町、鶏 林）高見沢氏）と岩村田（山下 吉沢好謙、利貸し兼）は、上州山間地向けの佐久米をあつかう米穀商ほか、金融業や運送業など商家文人が多い。ともに上州と緊密にむすばれる。

上州山間部の砥石産地を軸に、信州の盆地から峠道を上州へ下り、舟運路沿いに利根川河岸地域まで、ほぼ100キ強が、商品流通と俳諧交流でむすばれていたのである。いわば「上信交流圏」「上信風雅圏」である。

さきの「蟬乃声」序文の半化坊闌更は、明和く安永期、信州上塩尻の「眠郎」（信州、蕨城山下、佐藤左右衛門良昭）の案内で小県郡から佐

久郡をまわり、峠を越えて上州へ入った。砥沢村の「蟬塚」建立（明和九年）と「蟬乃声」刊行（安永三年）、そして『多胡碑集』刊行（安永三年刊）ほかを世話したあと、足尾谷の大間々の奥「大原」（有無の日記 には入集十三八）まで足をのびし、上州各地を遊歴しながら似鳩とも会い、武州をへて目指す江戸「二夜庵」へ入っている。

天明期には江戸の蕉風に見切りをつけて京都芭蕉堂へ移るが、信州から上州各地にいたる闌更の遊歴は、この「上信風雅ルート」「上信風雅圏」の在村俳人連の世話による。

「眠郎」は、編著『雪の薄』（安永六 年刊）で知られる。序は「常陽五峰」、跋は「上毛大間々百丈」、「信陽蕨城山下藤湖北」である。¹⁵⁾

「五峰」島氏は常州那珂郡額田村の人。俳書『俳諧雑語』（寛政九年）をのこすか。松谷追善『有無の日記』「子規」の項、松谷発句「しつかさや檜原の奥の子規」に付けた脇句に、「わらひましりに草しける道五峰」がみえる。

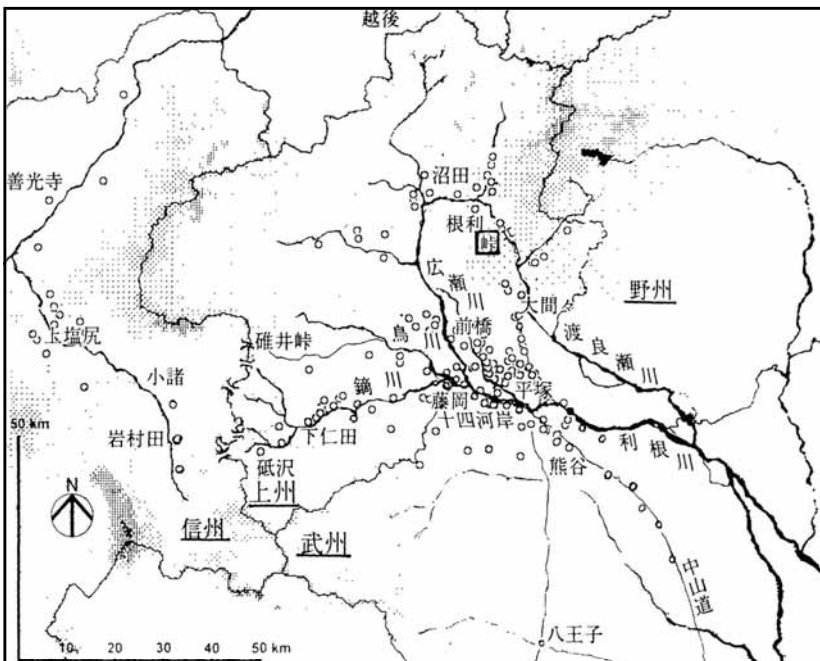
「百丈」は根岸氏。似鳩門人の一人で、嫡子「甘谷」が百日忌追善集『老時鳥』（天明元年）をのこした（篠木弘明「上毛古書解題」）。おなじく「野薔薇」の項に、松谷発句「よけて通る荊にも

花の匂ひ哉」の脇句「地を這ふ蟬に心とまりぬ 百丈」がみえる。

「信陽燕城山」(別称「岩端」)は、信州小県郡上塩尻村の背後「虚空蔵山」で、岩頭の絶壁の美称が「燕城」あるいは「岩端」(いわはな)である。上塩尻村の蚕種商仲間全員加入の俳諧結社「岩端社」が活発に活動する。「藤湖北」は、それらの中核をなす一人、藤本八郎右衛門信邑である。

下巻には、編者「眠郎」の仲間「燕城山下連 20人」をはじめ、信州全54人、武州全48人、上州全197人のほか、北は奥州 羽州、東は野州 常州、南は東都から下総や甲州、西は東海道筋や京都からも参加する。信州は諏訪8、上田6、小布施4、善光寺2などにおよぶ。

上州や武州の多くは、上塩尻蚕種商の定宿の村分布とかさなる。蚕種商俳人が各地を結びつけていた観がある。つまり『雪の薄』は、編の信州、序の上州、跋の常州を軸に、隣接の武州や野州や甲州から多数が加わったもので、蚕種行商路と舟運路がむすぶ、まさに峠越えと河岸沿いの「上信風雅圏」を代表する一大在村俳書だったのである。(「利根川十四河岸と風雅交流網分布図」参照)⁽¹⁶⁾
図中の峠マークは「根利峠」。足尾銅山から平塚河岸に



いたる幕府御用銅の出荷路「あかがね街道」の途中、水沼村の下で北方向へ別れ、峠越して根利村から根利川く片品川流域の村々、さらには利根川上流の沼田城下へつながる。「根利道」とよばれる。

平塚河岸の八軒問屋のひとつ北爪家文書「荷物請払帳」^(文化元年)の扱ひ品目のうち、「炭、薪木、板」など山村の産物ほとんどは、赤城山北麓の沼田や根利付近から「根利道」を通って大間々から平塚河岸へ運ばれ、利根川舟運で江戸本所く深川などの薪炭商や材木商へ荷送りする。

幕末から明治期の鉄道開通までは、沼田地域の蚕種や生糸の横浜出荷路も、この「根利道」だったという。河岸の後背地をつなぐ峠道は、海外までつながるものであった。

いづれにせよ、行き倒れ人「似鳩」が地域宗匠に生まれかわって得た門人たちは、こうした商品流通と風雅交流が表裏一体で交錯する「利根川河岸地帯」の在村俳人連だったのである。

似鳩の地域交流と最期の別れ こうして似鳩は二十七年間、これらの地域門人たちに順繰りによばれては句会を開きつづけた。丁寧書きとめた日記には、近隣の弟子

宅にまねかれての句会と宴席の記事がつづく。近隣の初心者もあつまり、蕉風を語っては一飯一酒を共にする…。入門者はふえつづけ、数百人をこえたという。

寛政九年十二月二十三日、雪降りのなか近隣の下道寺村「思永」の句宴によばれ、帰り道に倒れた。⁽¹⁷⁾まもなく助けられたが、雪に自分の顔形がみえたと語り、その夜、息をひきとった。地域宗匠二十七年目の六十三歳。行き倒れて生まれかわった似鳩らしい最期であった。墓は辞世句を正面に刻み、上蓮沼村^(いま伊勢崎市上蓮町)に現存する^(市指定)。

地「元俳人連が編んだ追善集『ゆきのかね』」^(文化元年『伊勢崎市史』資料編3)は、辞世句「雪仏生れたときの顔に似よ 似鳩」をかかげる。門人の代表「蓮沼村嵐黛」の弔辞は、二十七年前の行き倒れ人「似鳩」の偶然的来訪と定住までの経緯を、さきの正月句会の二句も入れ、こう語る^(商売は引用者)。

爰に栗庵のあるしも、元禄のむかしをしたひ、国く^(名所古蹟カ)の名古^(頭カ)を泊し、今年廿有七とせの先、雪しきりなる夕部、ふと我が里に來まして、律の虚いほりに越年せし元旦、蝶鳥の心はいらす花の春 世につるゝ師走のをとや水車、此吟ありしより、近きわたりの誰かれ、隨身門入の人びと少からず、：師走

末三日、…日記のはしに雪仏の句を書きし、一時の
なやみに眠るかごとく、あたし野の雪ときへ給ひぬ。

「馬見塚劍二」の弔辞も、似鳩亡きあと何をたよりに雅
道を歩んだらよいかと、門葉の悲歎のかぎりを語る。

あはれ吾か似鳩先生、…世の人の見つけぬ花に庵を
むすびてより、正風を遠近になびかす事年あり。…
門葉の悲歎せつなる中に、我なを闇夜に一灯を失ふ
ごとく、いつれの杖にすがりて雅道をあゆまん、い
つれの袂にたよりにて風流をもてあそばんや。

誰とも知れぬ行き倒れ人でも助け、風雅さえあれば親
密に交流、力量をみとめれば師に仰ぐことさえ当然とす
る。歿すれば、肉親にもひとしい悲歎のなか、墓を建立
し、追善集を捧げる。利根川河岸地帯という一定地域内
で、こうした風雅交流の親密性ゝ出会い性、さらにはそ
の融通無碍ぶりが展開していたのである。

これら在村文人の実態は、農身分の百姓である。地域
で村役を担い、生業で豪農商地主経営をいとなむ。一身
に生業と村役と風雅を業雅一体で担う存在、いわば「村
役豪農商人」である。一定地域に生業と村役と風雅が
表裏一体でひろがる姿は、「風雅公共圏」と呼ぶにふさわ

しい。いわば「利根川河岸地帯風雅公共圏」である。

3 初対面での風雅交流

——大野景山『斗藪雜記』にみる——

初対面の風雅交流 こうした利根川河岸地帯へ、遊歴の
旅で入った文人は数多いが、その一人、武州荏原郡大井
村名主文人「大野景山」の、上州から信州までの紀行文
『斗藪雜記』（とさう）をみよう。（三年）⁽¹⁸⁾

『斗藪雜記』は、山水風景や名所旧跡の雅趣にはほと
んどふれず、もっぱら人との出会いや問答の即物的な描
写に終始すると評される。それだけに、風雅の旅での出
会いや風雅交流の実態がよく読みとれる。⁽¹⁹⁾

信州へむかう途中、武州く上州間をみよう。通り道で
上中条村（埼玉郡忍爾
熊谷太田間）に「夫雪」という医家俳人がいると耳
にし、村人に教えられて「田口安貞といふを訪ふ」て尋
ねたところ、上中条村は「道の程二三里も隔たりたり、
まづ昼飯を振舞ふべしとて膳を出」してくれた。

「そのもてなし奇麗に會席料理に等しく、…其の取り
なし只ならず」の親切的接待をうけたうえ、あたらしい

草鞋を出して曰く「今宵とむべきなれども、ちかきわた
り彌藤五といふ処に、「五樓」いふあり、みづからは俳諧
もせざれば、かの方にて遊び給へ添書すべしというて文
通を出し」てくれた。その深切な応対は「心友に増り」
たりとする。

道を尋ねただけの初対面でも、風雅人とあれば上等な
食事を供する、泊めたいが自分より近隣の文人「五樓」
の方がふさわしいからといって紹介状を書く。「心友」(心を
あえる友として理解し)にまさる親切さだったというのである。

つづいて訪うた上中條村の医家俳人についても、「紫峯
庵夫雪を訪うてやどり、初めて面会するといへども、
七十にちかく再会期し難く、只思ひを述べて歌仙「巻を
つづる」と記す。初対面でも親密に應對されて宿も呈さ
れたが、二人ともに老令で再会はできないだろうとの思
いで、歌仙連歌を巻いたというのである。

「歌仙一卷」は、発句よりもさらに深い想いと敬意を
こめた風雅交歓となる。風雅交流の「一期一会」を、さ
らにつよく意識したことになろう。

初対面での俳諧問答 初対面では、どのような対話や俳
諧問答がおこなわれるのか。厩橋(橋)で「此の地に天山評

友といへる俳人ありと聞」いて訪れたときの問答である。

初日、「しかぐの由を申して宿を乞ふ」たところ、「日
暮に俳人を尋ぬる法やある、行脚十七ヶ條をしらざるは、
俳諧の行脚にあるべからず。とくく帰り給へ」となじ
り、内へも入れなかつたという。厳格な人だつたか。

宿屋に泊まつて翌日に再訪すると、天山は相手を試す
べく、「まづ発句を聞くべし」と問いかけた。景山が「折
りて行くは乞食にあらず鬼薊おにあざみ／栗柿の間やさつきの小
蓑干す」の二句をしめすと、「叮嚀ていねいにものして戴きて一見」
したうえで、俳諧問答に入つたとする。

試して認めなければ、儀礼的な句交換でおわらせる慣
習だったのであろう。ここでは景山句を丁寧に見た上で
力量をみとめ、つぎの俳諧問答に入っている。

命ふたつ中に活きたる桜かな といふ句は、如何解し
給ふやと問ふ。予答へて、久しく逢はざる人に再会
してよみ給ふ玉吟なり、といへば歎諾たんたす。

この句は、芭蕉が『野ざらし紀行』で「水口にて、二十
年を経て故人に逢ふ」として詠んだ句で、「故人」(古人
旧友)は
廿年前に伊賀で会っている少年、「土芳」服部保英のこと
(伊賀藩士俳人、貴重型)。
(伊賀藩士俳人、貴重型)。芭蕉句の詠まれた背景をよく知っている

かを試したのであろう。久しく逢はざる人に再会したときの玉吟との正解に、よろこんでうなずいたのである。

ついで景山が試問し、天山が答える。

予問うて曰く。腫物にさ、はる、柳のしなへ哉、腫物に柳のさはるしなへ哉、どちを取りたまふと尋ぬれば、腫物に柳の障る方可然といはるゝといふ。腫物に柳

の障るとは、首切れとの評あれども、又大切の柳一本去来に預くるとの事あれば、腫物に柳の方に予も心

ありと。（「首切れ」は上五句が構成上意、味をなさないこと許六の意見）

この芭蕉句は直弟子に二種類がつたえられ、ちよつとした論戦をくりひろげている。（「去来抄」中「同門評」）。去来は芭蕉の元句

「腫物に柳のさはるしなへ哉」が正しいとし、芭蕉書簡にも慥に「柳のさはる」とあると主張、支考や許六は、師はよく手直しするから直した句「腫物にさはる柳のしなへ哉」が正しいと主張したというのである。

各地在村の蕉風連でもしばしば話題にされたのである。う、景山がこれを採り上げて問うたところ天山は、「首切れ」との批判もあるが、芭蕉が去来に托した「腫物に柳のさはる」の方に、心ありと答えたので、意気投合して「俳談数刻」、「きのふに替りいとまめやかにものして、遂に

法に叶ひて立別れ」たと記す。景山も、芭蕉句の知識の有無を問うたことになる。

「法に叶ひ」は風雅交歓の作法に叶うの意か。風雅の作法にのっとりさえすれば、昨日の初対面での行き違いも抜きにして意気投合、半日をともにすごす親密さを発揮したのである。

この顛末を、その前日に会っていた厩橋十八郷（いま前橋市内）の養行寺僧「嘯月」を再訪して語つたところ、「きのふの振舞をいきどほりもせず、再び行きて尋ね給ふ志し、風流にして行脚はかくありたきものなりと感じ給」うたと記す。景山も、あらためて風流く風雅の精神のありかた再認識したことであらう。

初対面で相手の句作技量をたしかめさえすれば、風雅の作法にのっとり、だれでも俳諧交歓や俳諧問答で数刻をすごす。それを当たり前とする小世界「風雅公共の場」が、遊歴先どこでもくりひろげられたのである。

信州善光寺近郊での出会い 信州へ入つてからの風雅交流も興味ふかいが、一ヶ所だけ、長文になるが、善光寺近郊の石村「白齋」とのめずらしい出会いをみておく。

「寒岳園白齋」峯村氏（安永元々、嘉永四年八十歳）は、水内郡石村（長野市豊野町石）

の人。村役は不明だが持高十一石余の上層農。善光寺の北ほぼ二里、北国街道と別れて飯山街道に入った位置で、小宿場として町場をなしていた。⁽²⁰⁾

「いづ方より来り玉ふと問ふ。東都の品川の脇、大井といふ所なりと答ふれば、むかし東都に旅宿せる時、弥生半の事なり、御殿山の花見んとてうかれ出でたる時、はからず蘇鉄庵桃洞(註)に出会、しかじかと物語れば、御殿の桜はさる事ながら、是より南十町程ゆきて大井といふ所あり。此の里に里正大野五蔵といふあり、郷士なるが門の前に台命桜とよび、いと目出度き桜あり。昔し將軍家此の里に成らせ給ひ、上意ありて桜を手折らせ給ふ。里人は五蔵桜とも云へり。あるじ風雅にして景山と呼びて懇意なれば、我れと同道して行き給へ、一夜やどりて連句せんと勸むれども、さがたき用事ありて辞して止みぬ。定めて右の桜あるべし。其の時面会せざれども、桃洞の物語りにて委しく聞きたれば、再会せる心地ぞせらる。いざこなたへ入り給うて語り給へと念頃に申されけるに、渋湯の方へ行く用事あり、重ねて尋ねべしというて立出でける…。

白斎若きころ江戸に遊んで御殿山の花見に出掛けたら知り合いに出会い、すぐ近くの大井村「里正大野五蔵」の門前桜が見事で、鷹狩りで見かけた將軍吉宗が一枝を所望したので「台命桜」と呼ばれ一見の価値がある…、五蔵も懇意の風雅人なので一緒に連句でもして一泊しようときそわれたが所用で辞し、あなたと面会はしなかつた…。今日は「再会せる心地」である、ぜひお入りをと言われたが、「渋湯」(近隣いま中野市 湯田中 渋湯)に用事があるとして、一句捧げて再会を約するにとどめた、というのである。

若き白斎が五蔵を訪れていれば、またそこに初対面の風雅交流が展開したことであろう。⁽²¹⁾

ここでの「再会せる心地」の対応は、時間をへだてた記憶上での空想のなせる技だが、初対面でも再会と感じて親密に対応してしまうような、独特な雰囲気がよくみられる。

これも「風雅公共の場」、ひろく「風雅公共圏」の特徴の一つといえよう。

4 風雅交流の超地域性

——大原幽学の遊歴にみる——

遊歴三十六年と定住十七年 風雅交流は、陸路・川路・海路をふくめ、交通路さえあれば、どこでも、だれでも、交流がひろがる。さきの⑤風雅交流の超地域性である。

ここでは、長年にわたる漂泊で、「どこでも」、「だれとでも」、身分や地域、藩域や国域をこえ、親密な交際をくりひろげた「大原幽学」（一七九七寛政九）（一八五八安政五）をみよう。⁽²³⁾

幽学は多くの書き物をのこしたが、出自についてはほとんど記録をのこさない。青少年期、尾張藩士の子として武芸修練にはげんでいたが、刃傷沙汰で勘当されたという。遺書に「僕十八歳にして漂泊の身となり」と記すのみ。（十八歳は文化十一年。）（下総遊友雅集題）

漂泊後まもなく、熱田神官の田島主膳宅に寄寓、文化十一〜十三年、田島主膳にしたがい京都九条家で古典学・観相学・歌道などを学んだとされる。

翌文政元年、高野山三昧院で仏教を学び、文政四年く

同六年、近江伊吹山の松尾寺に寄寓し「提宗上人」から多くを学んだ。のちの農村改良運動や児童教育をささえる道徳学「性学」の基本を培ったのも、ここであった。

幽学の漂泊と遊歴の旅は、学びの旅でもあった。さきの大野景山の遊歴とは対照的で、興味ふかい。⁽²³⁾

松尾寺を辞して数年、畿内近国を漂泊しながら京都で迎えた文政十二年正月、「四日より道の談話始りけり」と記す。こうした言い方は『口まめ草』でははじめて。この三十三歳の文政十二年一月、本格的に道を説きはじめてとみてよからう。⁽²⁴⁾

しかし遊歴つづきは相変わらずで、明けて文政十三年（十一月十日）（天保改元）、京周辺や近江各地を遊歴しながら三月二十一日、七年ぶりに伊吹山松尾寺に師「提宗上人」を再訪、二十三日まで滞在している。

七ケ年めにて、師の安否をとほむと、対面して互ひに無事にありしを悦び、しばらくは言葉も無く、泪心中に満る而已。夜に入れば伏臥をともし給ふ。

逗留。僕国々遊歴して御伝授を活用したる事抔語ること終日す。或は道の微妙幽玄の月々日々明らかに知れる所々を語れば、師は悦びの余り、感泪

をつゝみ給ひて曰く、汝予が如く隱者に陥ること無ふして、世に道を伝へ呉よかしと宣玉ひける。

師の其志有難くて、僕感涙堪へかねて言を出すことあたはず、唯伏て心中に承受する而已。師怒て曰く、汝何ぞ迫るや。(狭るの意)其せまき心もて、何ぞ世に道を伝ふることのならんやと而已にて、言止みけり。

こゝにおいて、僕が心中雲の晴たる如くに成りて、人の心は天地の和の如くなる所以、愈明らかにより、日関原迄出て宿りぬ。

松尾寺でうけた教えを遊歴の先々で「御伝授を活用」したと、月日を重ねるごとに自覚をふかめた「道の微味幽玄」(のち著「微味」幽玄考あり)の内容などを語ると、師は感涙を隠しながら「世に道を伝へ呉よかし」と願つたが、感激のあまり承諾の意がすぐ言葉にならなかつたところ、師は怒つて「何ぞ世に道を伝ふることのならんや」と言うだけで口を閉じてしまった、というのである。

「汝明けねれば早々出立して道を施すべし。外に語るべき言半句も無しと而已にて、後は口を閉ぢても、言ひ給はず」とも記す。

提宗は、幽学の遊歴を、物見遊山風の優雅な遊歴半分、

世に道を説く「御伝授を活用」半分とみて、突き放したのである。

たしかに物見遊山風の遊歴も多かつたが、ここではじめて幽学は、すべての迷いを捨てて道を説く決意をあらたにした。翌二十三日早朝、「思召さるゝ条、僕が心中に止る上は、曾て是をうしなふことなしと答て出立」したと記す。

折からお蔭参りで混雑するなか伊勢詣をすませ、伊勢路から中山道へ入り、八月朔日塩尻峠、三日和田峠を越えた長窪宿で「足も疲れ路銀も尽たれば逗留」、ようやく八月九日に上田城下に入った。⁽²⁵⁾

ここで本格的に道を説き出したが、すぐ「友人多く成りぬ」るなか、「此地の友人稽古はげしく多用故、しるさねば忘れけり」と記すほど、「道話」と「稽古」が激しくなった。「稽古弥々励しく改心の者多し」とも記す。

学びの旅だった幽学の漂泊と遊歴は、教諭の旅に転じたのである。

十月二十日、海野町の豪商「小野澤六左衛門主」に人柄を見込まれ、子の辰三郎「三秋亭胡雀」の病氣療養のため、諏訪温泉の名医「立木うし」への付き添いを頼ま

れた。乞われるままに「胡雀」と出立して一ヶ月、後述のような愉快な旅と湯治で病気は完治、「父六左衛門主限りなく悦ばれて、僕をどこへもやらじとて、是より此家を宿と定め日々方々へ行つ来つ語らひぬ」しつつ、天保二年元旦を迎えた。

天保二年元旦、「辰三郎浮丸半月の三人り学びの法則を定められけり。九日より入門の者多く、愈々稽古はげしく成りぬ」と記す。熱心な門人が「学びの法則」を定め、正月明けで入門者が激増、「稽古」がますます白熱したのである。

二月にまねかれた小諸でも、「十九日十二人入門有り、稽古励しく、少しの中に道たる所以を知る者多く」と記す。上田に帰っても「二十一人新加入有り、稽古愈々励しく」がつづく。四月、「僕疲れ甚しければとて友人のすゝめに任せ、保養の爲め善光寺へ詣出る」ことになるが、上田へもどれば、なお「日々入門の人多く、稽古弥々励しく、改心の者多し」がつづいた。

ふたたび「僕疲れければ友人のすゝめに任せ、五月六日、友人四人にて新別所といへる温泉に入りて、安樂寺に遊ぶこと楽しく有りけり」だったが、まもなく「友人

追々に来りて十余人と成り、世間の風説を恐て十三日上田に帰る」ことになり、またまた「稽古益々励しく、昼夜まどろむいとまなし」がつづいた。

「稽古」の内容は明確には記されないが、幽学が説いた「道話」の内容を、門人みずから「稽古」して考えつめることで「改心」にいたる、一種自己鍛錬の仕法であったか。しばしば「まどろむ暇なく」「僕疲れ…」と記すほどの、緊張連続のものであったらしい。⁽²⁶⁾

道話を語る師一人の場が、稽古と改心の共同の場、一種道徳公共圏に転化したとみることもできる。

しかし、門人急増で世間の評判が高まれば高まるほど、あらぬ方向への「世間の風説を恐れ、人目を憚らざるを得なくなつた。藩の監視も強まつていたと思われる。

上田に入つて半年余り、ついにみずから信州を離れざるを得ないと判断した。「先月⁽²⁷⁾より暇をこふて漸々出立の日」を決めて八月九日、上田を出立して碓氷峠口で見送りの門人連と別れ、中山道で関東へ入つた。

漂泊ほぼ一年、上方へもどるつもりが、たまたま浦賀ですすめられて房総へ渡海、館山でまたすすめられるままに房総各地で遊歴数年。天保飢饉で荒廃がすすむなか、

どこへいっても道を説くたびに門人が増え、ついに香取郡長部村に居宅と道場をあたえられて定住、農村改良運動に専念するにいたる。

幽学の名を歴史にのこした農村活動も、遊歴の偶然と地域の必然のなせる業であった。

以後、多くの門人と支持者を得、独自の道徳学「性理学」と農村仕法「先祖株」および児童教育の実践につとめた。生産回復で模範村として褒賞もされたが、仕法のあり方で公儀の疑いをうけ、足かけ六年の裁きで、幽学押込百日、道場棄却、先祖株組合解散の処分をうけた。

一八五八年安政五年、押込百日を終えた翌月、三月八日付の遺書をのこし、村の墓地で自刃するにいたる。⁽²⁷⁾

『口まめ草』にみる出会いと交流 こうした幽学遊歴の足跡と人との出会いは、『口まめ草』(文政九年初筆)にくわしい。

【別表「大原幽学遊歴地一覽」参照】。

「路銀逼迫」で動けぬ日々もあつたが、記述は、日程や宿泊先、名所旧跡の見聞や見かけた碑文、出会った人との会話や交歓した詩歌句、自作の詩歌句など、興のおもむくままに記録している。

幽学にとっては、日々の漂泊が人生そのものであつた。

どこでも、だれとでも、何かをきっかけに言葉を交わせば、初対面ですぐ人柄を惚れ込まれる。文人であれば意気投合、会話がはずんで夜更まで語りひあう。詩歌句を交わす。、再会を約束する。、仲間への紹介状をもらう。紹介されるままにつきの遊歴先が決まる。。

幽学の足跡ほとんどが、偶然のつみかさねだった観をみせる。漂泊の遊歴、遊歴中の遊歴だったといえよう。

信州上田、湯治の付き添い さきにふれたように 文政十三(天保元)年八月九日、上田に入って「友人多く成りぬ」

るなか、十月二十日、海野町の豪商「小野澤六左衛門主」に人柄を見込まれ、子の辰三郎「三秋亭胡雀」の病い療養のため、諏訪温泉の名医「立木うし」への付き添いを頼まれた。どのような湯治の旅であつたか。幽学の人柄がよくわかる。

「胡雀」の病は、いまでいう一種心身症だったらしい。

幽学はすぐ察し、ユーモアで笑いをまきおこすのが一番と考えたか。往きの道中から「胡雀」とたわむれ、病人として乗せた駕籠昇きの雲助まで笑いにまきこむ旅をくりひろげた。

上田を出てまもなく、道端でみかけた柿を喰いたそう

大原幽学 遊歴地一覽

- 1814文化11年** 3月、生家を勘当され、熱田神宮神官の田島主膳に寄寓、畿内を漂泊。9月、京都九条家に転じた田島主膳に寄寓、典籍 観相 歌道などを学ぶ。(中井信彦『大原幽学』「略年譜」)
- 1816文化13年** 7月、辞して畿内を漂泊。
- 1818文政元年** 高野山蓮華谷の蓮華三昧院に寄寓して仏教を学ぶ。
- 1821文政3年** 高野山を辞して畿内近国を遍歴。(ここまで中井信彦『大原幽学』「略年譜」)
- 1822文政4～5年頃** 伊賀上野～近江日野～八幡～彦根。伊吹山松尾寺に寄寓、「提宗上人」に易学や観相学を学ぶ。
- 1823文政6年** 松尾寺を辞す「略年譜」～大和十束村～高野山。
- 1825文政8年** 8月頃 畿内近国を遍歴。紀州有田郡立神村～京都。
10月頃「九条殿に仕へらるゝ上村うしに別れをつけて僕は伏見より夜舟に乗りて大阪に下り」諸国遊歴(ここまで『日記拾遺』)。
- 1826文政9年** 7月17日 大阪～兵庫～四国丸亀～播州室津～姫路～明石～西宮～尼ヶ崎～天王寺～堺～大阪～奈良～郡山(越年)。
- 1827文政10年** 郡山～大阪～根来～和歌山～堺～大阪～高野山～大阪～池田～伊丹～大阪～橋本～大阪(越年)。
- 1828文政11年** 大阪～橋本～京都～伏見～宇治～黄檗山～大阪～伏見～京都～小浜～敦賀～三国～敦賀～唐崎～大津～三井寺～瀬田～石山寺～京都～亀山～京都～(越年)。
- 1829文政12年** 京都～伏見～大阪～有馬～室津～丸亀～阿波新宮～徳島～紀州和田～大阪～高野山～伏見～京都～坂本～京都(「是寅三月までの日記失いて不知」)(越年地不明)。
- 1830文政13(天保元年)** 3月 大阪～京都～大阪～伏見～京都～膳所～坂本～長浜～伊吹山松尾寺(3月21～23日)「七ヶ年目にて師(馬)の安否をとほむ…。伊勢～中山道～信州～塩尻宿～8月3日長窪宿「路銀も尽たれば逗留」、8月9日上田入り。10月20日、海野町小野沢六左衛門にたのまれ病弱の子息の湯治の付き添いで諏訪へ。11月17日、上田「此地の友人稽古はげしく多用故しるさねば忘れけり」(越年)。
- 1831天保2年** 4月6日「稽古愈々励しく僕疲れ甚だ」しく門人にすすめられて善光寺へ。善光寺～戸隠～善光寺～川中島～稲荷山～娑捨山～坂木～上田。「入門の人多く稽古愈々励し」きたため別所温泉で湯治するも、「友人追々…十余人…世間の風説を恐て十三日、上田に帰る。…稽古益々励しく昼夜まどろむいとまなし」で小諸へ。小諸でも「二十九日より昼夜のわかちなく学ぶ者多」いので、ついに「暇をこふ」。8月9日 上田を出立してふたたび漂泊の旅へ。小諸～碓氷峠～松井田～榛名山～熊谷～江戸(8月14日)～武州八王子(9月4日)～府中～高尾山(9月9日)～高井戸～江戸(9月11日)～神奈川～藤沢遊行寺～江ノ島～片瀬辰口寺～鎌倉(9月17日)～金沢八景～浦賀(9月17日)～見崎(馬)湊(9月26日)～浦賀(11月17日カ)、浦賀宿屋「紺屋七兵衛、僕はより上方に登るべき旨を語れば主曰く、此海三里の渡を越えて鋸山…一覽すべし」といわれ、渡船で安房百子村(11月18日)～鋸山～日本寺～小浦村～岡本村～館山～長須賀(11月20日)「林潤造先生に語らひ遂に此家に宿る。僕帰上のよしを語れば…、先生曰く…房陽七浦を一見なされば国元への土産、少し知る人に伝言すべし」～那古(11月21日)～滝口村～野島弁財天(12月2日)～和田～仁右衛門島～内浦～小湊誕生寺～前原～長須賀(12月7日)「林先生…先づとまれ、方々の知人たちに伝書すべし、先づ行ゆきて遊べしとねんごろに言葉を尽くし給へり」～市部村～百子村～富津(12月10日)～鹿野山～郡村～久留利～大多喜～芳賀村～勝浦村～部原村～忍宿村～長者町～ノ宮(12月22日)「路銀逼迫にて西房州へ行き難く、逗留して越年…」。

- 1832 天保3年** ノ宮～姉ヶ崎～館山(1月14日)「林うし、…種々物語してしばし此辺に遊ぶべきよしを語り、所々へ伝書もらい…」～姉ヶ崎(1月12日)～館山(1月14日)「林うしに至り旧冬路銀逼迫によりて一の宮に逗留せる由語れば、うし曰く、いかにも遊歴するには多稽ならずば難しと歎息せられけり。…種々物語して…所々へ伝書もらひ出立」～岡本村～小浦～市部～保田～久留利(3月6日)「岡本藤左衛門うしに至りて逗留、時に御隠居重郎右衛門うしは歌人のよしなれば短冊をこふ…」～一の宮(3月22日)～久留里「御隠居護堂うし(岡本氏)は出府…」～江戸(4月13日、岡本氏江戸屋敷へ、16日出立)～金沢～大津～三浦～鎌倉「再見せんと思いつき」(4月18日)～辰口寺～江戸(4月25日)～竹林～久留利(5月7日護堂うし)～(房総各地)～一の宮(7月14日)～(房総各地)～香取(9月14日)「友人十二人打揃て学び励しき也」～八日市場(9月17日)「学びいよ、励し」～房総各地～久留里「林うしに至り久留利のよしを委しく語れば、悦ばるゝこと限りなふして、僕を愛し給へり」～一の宮(越年)。
- 1833 天保4年** 一の宮～東金～八日市場～鹿島(1月9日)「香取主典ぬし…主従十二人車座に成りて酒くみかはし」～(房総各地 省略)。
- 1834 天保5年** 房総各地～万歳村「十人入門神文」～房総各地で入門70名～鐫木村「稽古はげしく多用に紛れしるさね忘れたる事多し」～一の宮(越年)。
- 1835 天保6年** 房総各地「(平)八日出立…飯倉…殿部田…長沼辺まで悉く廻り…、小見川に至りて越年」。
- 1836 天保7年** 房総各地「(平)二日早朝より学び励しく…」～門人連と奥州遊歴～「三月四日より別して稽古励しく」～「八月…、早々より夜更に至るまで道の談話」～長部村(越年)。
- 1837 天保8年** 房総各地「なほ学び励しく」(越年)。
- 1838 天保9年** 房総各地「北総の友人残る方なく行て見るに、何方も学ばれししるし有て、童子達までもおなじくなりしを見る楽しき…」～長沼村(越年)。
- 1839 天保10年** 房総各地(略)。
- 1839 天保11年** 房総各地(略)。長谷部村に居宅と道場を建設、土地分合・先祖株など農村改良がすすむ(以下略)。

にする胡雀に、味見して渋いと知りながら、何食わぬ顔で手渡す。よるこんでかぶりついたあまりの渋さにあきれた胡雀に、「僕おかしさを忍び兼て、ハハハハハハハ」と笑い転げる。胡雀もさつそく狂歌で、「甘ひとて 呉たる柿の恨みさへいふことならぬ口の渋さよ 雀」と戯れ返し、雲助まで「ハハハハハ」と笑い転げる、というようにである。

和田峠を下るとき、雲助に村名を問うて「とよはし村(和田峠下の土用干し)」と聞き、「ナンダイ此寒ひのにどよばし村とは…」とふざけかかる。雲助が「榎橋(といはし)でゴウス」と答えると、「そんなら、にごりをぬけばよい歎」とまたふざけかかる。雲助がまじめに「エー此旦那もわからない人だ」とぼやくと、合棒の雲助が、「ヤア手前、今日はかな(仮色)のちがったを知て居るな。それじゃ雲助を止めて歌よみにも成るかイ」とふざけかかる。

文字を知るなら歌よみになれという雲助の言もおもしろい。文字知りや歌よみを特別視し、嘲笑視していたことになるか。⁽²⁸⁾

興にのつた胡雀は、幽学(改訂)に「コウ遊サン、今日はおまへ(俵)らひもんだぜ。吉備大臣サ」とふざけかかる。なぜかと聞く幽学を、またまた「おめへくも(蜘蛛)に教られたじやネ工歎」とからかう。気付いた幽学は、「しらざるをくもの助に教へられからくわらひ渡るとよはし(樋橋)遊」と返歌しつつ、「扱今日は笑ふこと限りなし。願の落ぬも不思議也」と記しながら、上諏訪温泉の湯治先、牡丹屋孫四郎方へ入っている。⁽²⁹⁾

胡雀の心身症は、すでに湯治先に着く時点で半ば恢復していたのであろう。ほぼ一ヶ月、暇にまかせて二人しきりに発句をたのしんでいるが、これをみかけた亭主の言動も興味ふかい。

十月三十日、雪が降ったので雪の作句を楽しんでいたら、「当家の主じ来りて、各々風流の御楽み、我等も加へ玉(ママ)とへり(間)ければ、夫れより半歌仙結ぬ」と記す。飛び入りを申し出てきたので三人で半歌仙を巻いたというのである。

途中で亭主が所用で呼ばれたので表六句で終るが、二人だけの風雅交流の場が、三人のいわば「風雅公共の場」に転化したのである。風雅の場は、つねにひらかれて伸縮自在、だれでも参入できるものだったのである。⁽³⁰⁾

帰路でも面白い場面がある。和田峠から上田へくだる脇往還、「ふけ村明神下」の茶屋「小倉屋」でお婆アに食事を頼んだら、あいにく「豆腐しかない」との答え。さっそく胡雀が「小倉屋の見世のばア殿心あらばいま一なべの(煮焼)にやきまたなむ」と狂歌でふざけかかると、老婆は大笑いして「急ぎとうふを煮て出しけり」。幽学と胡雀は「これにて酒杯呑み、明神の地景をめぐ」ったというのである。

山峡の小村、小倉屋の老婆が、小倉百人一首に精通していたことをしめす。山の奥々津々浦々まで、在村文化がひろまっていたことの証でもあろう。

幽学の人柄は、世事万端に通じた独特のユーモアに満ちていた。初対面でも病人でも、出会いの雲助でも茶屋のお婆アでも、すぐ狂歌と笑いの共有の場にまきこんでしまう。こうした独特の話術と感化力は、道を説く場ですらに発揮されたことであろう。「狂歌と笑いと道話の公

共圏」といえようか。⁽³¹⁾

こうして一ヶ月、「笑ふこと限りなし」の旅で胡雀はすっかり元気を恢復し、十一月半ばに帰宅した。さきのように「父六衛門主限りなく悦ばれて、僕をどこへもやらじとて、是より此家を宿と定め日々方々へ行つ来つ語らひぬ」となった。そこで道を説きつづけるわけだが、「友人稽古はげしく多用故、しるさねば忘れけり」と記すほど、門人連の修行は激しくなった。

間もなく上田で越年、さきのように天保二年正月、急増する門人の稽古ますます激しく、ついに人目を憚って上田を去り、関東各地を漂泊、偶然ながらその年の内に房総へ入ることとなった。

5 幽学の房総入りと文人交流

房総入りと館山藩儒「林先生」との出会い 幽学の名を歴史にのこした農村活動のきっかけは、浦賀からの偶然の房総入りと、最初の出会いで「林潤造先生」に勧められた房総遊歴に負うところが大きい。

鎌倉を遊歴して三崎から船で城ヶ島を見物、浦賀から

房総へ入ったときのようすをみよう。

未の刻浦賀に着船、紺屋に宿る。僕はより上方に登るべき旨を語れば、主曰く、此海三りの渡を越て鋸山といへる銘山あり、行きて一覽すべしと。強て勧むるに任せ、其夜湊に沙汰すれば、明早朝便船ありといふ。明る十八日早朝便船に乗り巳の上刻(午前九時頃)、百子村に着ぬ。

上方へ帰るつもりだった幽学が、すすめられるままに三里の渡しを越え、房総へ入ったのである。幽学の本命の地ともいうべき房総入りも、まずは偶然のなせる業だったのである

相州浦賀と房州館山は、陸路でこそ五〇里約二〇〇キ里におよぶが、海上なら約三里一二キ余。回船や渡船など、日常の人と商品と情報の往来はさかんであった。浦賀の奉額句合には、対岸のみならず半島向こうの湊もふくめ、安房の在村俳人の参加が少なくない(分布図を参照)。 「此海三里の渡」は、相房ともに日常茶飯事だったのである。

もし宿の亭主の勧めなきまま房総入りせず、浦賀から上方へもどっていたら、大原幽学の名は、歴史にのこることはなかったであろう。日本歴史の一頁を画した点で、

「此海三里の渡」の意味は大きかった。

房総入り最初の訪問地は鋸山の日本寺(曹洞宗、本尊三昧の行伝)、ついで市部村の福最院(福聚院)。そこでの出会いをこう記す。

住僧大静といへるは、信州上田より来りし由にて、厚く饗応されて宿る。：明る(月)十九日出立して、山を越へて市部村福最院に立寄りければ、玄秀といへる医師来り、四方山の物語のうち、僕を強て逗めんといへり。再会を約して此所を出出で、小浦村浜屋仁右衛門主に立寄り。此主も亦止む。又再会を約して此家を出出で、岡本村堀口駿河主に立寄り。又止む。又再会を約して立出で、立山観音寺に至る。此住僧は尾州野田村龍湮寺祖宗といひし僧のよし。此寺に宿る。庄三郎・兵吉の二人来りてよむすがら語りけり。此辺五六里の中、上方に縁有りて話し能くあへり。

日本寺ではつい三ヶ月前、八月九日に出立したばかりの信州上田の地名一つで意気投合したのであろう、手厚く饗応されて一泊。市部村福最院でも、初対面の医師「玄秀」と四方山話でまたまた意気投合、一泊せよとの懇願に再会を約して別れ、小浦村でも浜屋仁右衛門主、岡本

村でも堀口駿河主と、それぞれ別れがたく再会を約している。

逗留をひきとめられて応じられないときは、たがいに再会を約束するのが、遊歴の慣習であったか。

つぎの館山観音寺では、尾張にいたという住僧と話が盛り上がったのであろう、一泊している。記録にのこしていない生地や出自も、ついなつかしさのあまり尾張生まれだと語った可能性もある。

このように幽学は、相手が文人であれば「堀口駿河主」(神皇文)のように、「主」または「ぬし」「うし」をつける。そのなかで、「先生」とよぶめずらしい事例が、館山在の長須賀「林潤造先生」である。幽学三五歳、初対面でつよい尊敬心をいただき、林潤造も若い漂泊の遊歴人幽学がすっかり気に入ったらしい。これまで幽学が経験したことないような好意と厚遇をしめしている。

「林潤造」は、安房館山藩の藩儒文人「新井文山」(一七七八—一八五二、一嘉永四年)のこと。初め林氏、字宏明、通称潤蔵・文左衛門、号文山。一四歳で江戸へ出て昌平塾で佐藤一斎に学び、松崎慊堂にも師事、天保十年(一八三九)に「新井文左衛門」として館山藩儒、のち郡奉行もつとめた(国書)。新井村の網元

の子で、父を失つて江戸へ遊学したという。幽学と会つたときは五二歳だったか。ここでも幽学は、上方へもどるつもりだと語っている。

明る(天保元年十一月)二十日出立して、同村の中長須賀林潤造

先生に語らひ、遂に此家に宿る。僕帰上のよしを語れば、先生曰く、此地迄来りて房陽七浦を一見なされば国元への土産、少し知る人々へ伝言すべし。：勦めらるゝに任せ、右一見の志を定め、二十一日出立して光善寺に至り、蘇鉄の高さ三丈五尺のよし。

：此形生花の如く三才(天地位)備りてあり、是ぞ日本一なるべし。：又なこ寺(那古寺)の蘇鉄は、泉州堺の蘇鉄より木少し太しといへども、十一本にして高さ丈より丈二尺まで也。

すすめられるままに房陽七浦を一回り、南国安房らしい大蘇鉄など名所見物をおえて林家にもどつたところ、さらに「方々の知人たちへ伝書すべし、先づ行ゆきて遊べしとねんごろに言葉を尽くし給へり」でひきとめられて一泊。すすめられるままに房総文人との出会いをつづけ、数日後に林先生宅へもどると、またまた引きとめられた。

「夕刻より酒杯給はりて先生曰く、このあと師走の旅は興ざめだろうから大晦日前にもどり我家で越年すべし、先つとまれ(道)、方々の知人達へ伝書すべし。先づ行きて遊べしと、ねんごろに言葉を尽くし給へり」うたと記す。

伝書のままに、市部村の医師文人「玄秀主」、富津村、鹿野山、郡村「三平源五左衛門ぬし」、木更津、久留利「巴屋八郎ぬし」、太田喜、芳賀村「勘解由ぬし」、勝浦、部原村「縫之助ぬし」をまわり、大風で「漁舟六七十艘行方知れず成りて、死人百七十人程有り」を見聞しながら、(天保二年)二十二日上総一ノ宮まできたところで、「路銀逼迫にて西房州へ行き難く逗留して越年」する羽目になった。

翌天保三年一月、松ヶ枝郷の浜辺で「長二十間の鯨よりに漁人数十人てんでに鎌・鋸持参り切取り」のようすを見たりしながら、十四日、約束の林先生宅にもどつた。すすめられた遊歴のようすを報告しながら、「旧冬路銀逼迫によりて一の宮に逗留しける由を語れば、うし曰く、いかにも遊歴するには多稽(マツ)ならずんば難しと嘆息せられけり」と記す。道話や俳諧和歌狂歌の指導や卜易など、いまの幽学の多芸振りを知りながらも、まだまだ不足なのかと同情しての嘆息であろう。

房総遊歴と久留里「岡本うし」との出会い このあと「林先生」にさらに「遊ぶべきよし」と言われて新たな伝書を授かり、各所をまわりながら三月六日(天保三年)、久留里に入って「岡本藤左衛門うしに至りて逗留」した。「岡本うし」は、隠居したその父「岡本重郎左衛門ぬし」が「林先生」とおなじく、大いに幽学を気に入ったようすで、幽学はその後しばしば訪れることになる。

「久留利岡本藤左衛門うし」は、もともと林先生から、「久留利御家老」(久留里藩三万石 上総国望陀郡)は隠居し「息岡本藤右衛門」が筆頭家老だが、その「弟新九郎といへる人少し放蕩也。此人を導びぎ給はゞ予も亦安んず」といわれていたが、「僕関東の人道びく事難きにや、心中に含みて、唯何となくいなめば」と快諾しなかつた一家。これがはじめての訪問となった。

林先生が幽学の教化力を見込んでいたこと、幽学は関東人は指導しにくいと感じていたことなどがわかる。幽学の教化力が房総農村で発揮される直前のようなすがうかえる。

岡本うしとの初対面では、「御隠居重郎右衛門うしは歌人のよし」と聞いて、「み空より光る言葉の玉ものを下

し給はゞ家づとにせん 遊」と書して短冊頂戴を願い、「かみつふさの 片山陰の土塊を 玉とあざむく君が言の葉 政易」を授かっている。

幽学は、相手が歌人であれば和歌を、俳人であれば発句を呈すなど、融通無碍の風雅交流をつづけていたのである。

六日から二十五日間の長逗留ののち、出立しようとしたが、「別れの名残とて酒杯給はり微酔して、何地の生れともさだかならぬ僕を、御心にさはらせもなうて、日々愛したまへるあり難たさに、うれしさや君が情の深きにぞ樂しむいろをそゆる花園 遊」と書き残して出立した、と記す。

後日に再訪したとき御隠居は出府中だったが、子息藤左衛門が預かつていた伝言には、「みやこ人(甲)大原うしの言の葉かへりごとまをす(魂合)とて、たまあへば逢みるたびに嬉しくてよ所の友(余所)とは思はざり鬼 護堂」とあり、隠居が帰るまで留守居のつもりで逗留せよといわれた、と記す。

「何地の生れともさだかならぬ僕」という幽学の自己認識、それを心の障りともせず幽学を愛してくれる有難さ、「みやこ人」とよばれた幽学の風雅振り、魂合う友で

余所の友とは思えない親友振り、などがわかる。

放蕩の「弟新九郎」の教化も引き受け、効果も上がったらしい。再訪した十月九日、「久留利岡本うしに至れば、御次男新九郎主に戸川氏の家督を被_レ仰付_一、いよく武士の規則相立べし；、政易うしは限りなく悦び給ひて泪を含み暫くは言葉もなく、；なほ此上も御教示給へ、かしく而已にて言止みぬ」と記す。

岡本隠居「政易うし」は、新九郎が立ち直つて縁戚の戸川家を嗣いだことを大いに悦び、今後とも指導してほしいと頼んだわけで、幽学も、苦手と思つていた「関東の人」も十分教育できると自覚したはずである。

このあと十二月二日(天保三年)、ふたたび館山で「又面(またむら)房

小林うしに至り、久留利のよしを委しく語れば、悦ばるゝこと限りなふして、僕を愛し給へり」と記す。

「林先生」「岡本うし」ともに、「愛し給ふ」の語を使つての表現である。期せずして二人が同じように幽学を愛しみ、それを幽学がふかく感謝していたことがわかる。こうした記録は、幽学でも稀である。その基礎には第一に、だれとでもすぐうちとけて心通わせあえる幽学の人柄があるろう。第二に、教養ある文人ならすぐ察知でき

るような、儒仏神や易学、俳諧和歌狂歌など、幽学の素養の高さ(ただし漢詩には全く手を出していない)。第三には、そうした人柄や素養が、長年の漂泊や遊歴で練り上げられ熟成していたこと。

さらに第四、相手二人とも、そうした幽学の人柄や素養をすぐ察知できる高位の藩儒級文人だったこともあろう(岡本氏は歌人で藩儒。とは明記されないが)。

ほか『口まめ草』には上田で、「当所の学頭三顧ぬし(註)」より書状来れり」もみえるが、この二人が、出会つた人のなかでもっとも高位の文人だったと考えられる。

いずれにせよ、まもなく本格化する農村改良運動にいたる直前の房総遊歴で、こうした文人交流があつたことは見逃せまい。

漂泊から定住へ、農村改良運動へ こうした「林先生」と「岡本うし」との出会いの後、ふたたび一の宮で越年、翌天保四年の足跡は、次第に東金く八日市場く殿部田く香取く銚子など東総地域にしぼられる。天保五年正月万歳村の「十人入門神文せられ」、六月鐮木村の「稽古はげしく」など、東総各地で門人の急増とはげしい稽古がづくなか、天保十年十二月には、「大森の役所より性理学(差し止め)さしとめの由」もおこる(天森の役所は淀。藩の飛地大森陣屋)。

翌十一年には居宅を提供され、さらに天保十三年、長部村の良左衛門ら門弟の重面立ちたちが、草庵と道場を改築した。「九月十八日より此草庵を僕が住家として、此所にて諸人に教をなしぬ」ことになった。三十五年におよぶ漂泊が終わったのである。

以上、幽学の風雅交流を、畿内から信州へ、関東へ、浦賀からの偶然の房総入り、「林先生」との出会いと房総遍歴、やがて農村改良運動の場となる東総入り、そして定住すべき住居と道場で長年の遊歴漂泊が終るまでをみてきた。

幽学の農村改良運動は、遊歴の偶然性と、幽学を待っていたかのような疲弊農村の必然性、その交点が生み出したものだったといえる。

産業協同組合的とされる農村改良運動そのものは諸書に詳しく、ここでははぶくが、長年の遊歴をささえてきた各地の風雅交流、および、偶然の房総入りと「林潤造先生」「岡本うし」との出会い、この歴史上の重大事をなす契機を生んだ点で、一大文化事件だったといえよう。生国をはなれた幽学の漂泊と遊歴は、地域や藩域など政治領域をこえるものであったが、さらには、閉ざされ

た、国境さえ心的には超えてしまうような⑥「超政治性」超国家性」も起きていた。風雅交流の極致というべき現象であろう。

場所は長崎。閉ざされた国境の唯一の窓口として一種独特な「埒外」扱いで、「風雅公共の場」あるいは「風雅公共圏」のあり方も独特な動きをふくむが、さきに概略だけはみてあり(拙著)、ここでの紙数も尽きた。別考としたい。

おわりに

以上、細部に入り込みすぎて冗漫にもなったが、風雅交流の実態と特徴を、ありのまま見てきた。

①風雅交流の対等性については、暗黙当然のこととして意識的に記されること稀な在村記録として、北信州での文言「一体書物など好ミ候ハ、付合大小高下無差別ものと存」を紹介、比較的貧しい在村文人の自尊心の高さや、貧富や階層の上下にとらわれない、風雅交流の対等性をみた。

②風雅交流の親密性③出会い性では、上州利根川中

流域で、行われ人の命を救い、風雅人として親密に交際し、実力の高さを知れば地域宗匠に迎えて二十数年にわたって師事、最期をみとり、葬送の儀をすませ、墓を建立し、追悼句を募って追善集まで刊行する、という事例をみた。武州荏原郡の名主文人大野景山『斗藪雜記』では、とくに初対面の出会いと俳諧問答を中心に、風雅交流の親密性をみた。

⑤風雅交流の超地域性では、大原幽学の青年期以来の漂泊と遊歴の記録『口まめ草』を追いながら、風雅の出会いの偶然性、出会いの場での親密性などをみながら、幽学の名と活動が歴史上に意義づけられる房総入りでさえ、出会いの偶然性と初対面の親密性によっていたことを確かめた。

いずれの場合も、個人的な出会いが周辺を巻き込んで小公共圏をなす実態を見出し、「風雅公共の場」ひろく「風雅公共圏」として位置づけてみた。

「風雅公共圏」については冒頭、人と人との出会いのあり方を基本から考え直してみた。生命存在としての人は、たがいを認め合う関係の場でのみ生きるとして、成員すべてが暗黙のうちに認めあう「意味」と「価値」と「信

用」を共有する場、一種「公共の場」が生じると見た。

その上で、風雅文化が公的な実名をはなれ私的な雅号で交流する点をふまえ、表の公的な実名による村役や生業の現実世界が、つねに裏の私的な雅号による風雅世界と表裏一体で公共性を支え合っている郡規模の地域を、前著にしたがい「風雅公共圏」と呼んでみた。⁽³²⁾

歴史にのこる幽学の農村改良運動の場も、その延長上にはじまることになる。

生命存在としての人の基本をなす「関係」の場、成員すべてが暗黙のうちに了解し合える「意味」と「価値」と「信用」を共有する「公共の場」は、近世という文化成熟の時代、①対等性く超身分性、②親密性、③出会い性、④信用保証性、⑤超地域性の諸特徴を呈する「風雅公共圏」として、さまざまな人間活動をささえる場をなしていたのである。

幽学が実践した農業協同組合的とされる農村改良運動は、時代の制約のなか不本意な形で自刃と中絶に迫込まれたが、多くの門弟たちは幕末の時代変動を生きぬき、つぎの資本制近代で生きつづける。

幽学がのこしたものの、門弟たちがひきついだもの、あ

らたな資本制がもたらしたものの等々が、明治国家の下、
どのような形であらたな公共の場をなし得るのか。⁽³³⁾のこさ
れた課題は多い。

【注】

(1) 文中「Ⅱ」はつまり、「Ⅴ」は乃至の意とする。「公共圏」
の語は、ハバーマスらヨーロッパ市民社会研究の翻訳諸
書の訳語に示唆はされたが、一般にみられる近代ヨーロ
ッパの公共圏概念の直輸入は採らない。ここでは、日本
古代もふくめ、人本来の始原の人のあり方から考え直し
てみた。近世末期までの「公共圏」のあらまし展望して
おくと、① 儀式や祭典など限られた時と場を庶民個々
の関心で埋め尽くす耀歌・歌垣・歌会・歌合・田楽・散楽・風
流・花見・紅葉狩りなどの祭典公共圏(仮称以下おた)、② 花見や
祭宴の無礼講や駆込み寺などの一種アジール公共圏、③
戦国大名や土豪らの連歌公共圏、④ 中世惣村の結(ゆい)や水
管理や宮座など半自治の惣村公共圏、⑤ 都市ほんらい
の楽市性による半自治的な都市公共圏、⑥ 家父長中心
の小家族による親族公共圏、⑦ 後述の風雅文化をめぐ
る風雅公共圏、⑧ 幕末では尊王攘夷運動く草莽運動の
漢詩・和歌交流と表裏一体の尊攘公共圏(いすれも仮題)、などが考

えられる。①②③⑦は時と場を限るが、日常の現実世界
と表裏一体で「公共圏」をなしたと考えられる。ヨーロ
ッパ市民社会研究のいわゆる「文芸公共圏」「市民的公
共圏」とのちがいがいも別考すべきだが、とりあえず整理し
ておくと、へ1へ公権力と対立する、私の領域の拡大では
ないこと、へ2へ公衆による自由な批判の言説空間では
ないこと、へ3へ自己の利害を階級として表現する政治
的公共圏ではないこと、へ4へ内面の自由(信教の自由)
に根ざすものではないこと、などが考えられる。⑧は風
雅公共圏が政治公共圏に転ずる事例として別考したい。

(2) 後述の「高魯」逸作の遺稿集『紅葉遺詩』(文政九年)の亀田鵬
斎序は、「建囊以来、承平日久、寒郷僻邑、文明之化ニ
浴ス」と記し(拙著③、建業は武具、を袋におさめる風武の意)、奥州伊達郡の在村俳書『三
七松集』(元禄)の菊守園見外序は、元禄以来の蕉風が慶応
の今にいたり「都鄙のすみくくまでこの道のおこなはる
ゝは、まことに徳化の余光なるべし」と記す。

在村文化は、都市文化をとり入れた風雅文化のみなら
ず、農事日誌・農書・蚕書・救荒書・開荒書など、飢饉
・一揆・災害の記録や地誌など地域の生産にかかわる生
産文化、日常の生産と生命の再生産活動(生殖く出産く
育児く生活く教育)としての生活文化でなりたつ。拙著

2001『近世の地域と在村文化』2001年、および同2009『近世の在村文化と書物出版』2009年(ともに吉川弘文館)。

(3) 近世の農山漁村では、有力農民の多くが村役につくともにも、生業では農蚕業や在方商や利貸しをいとむ富裕な「豪農商兼大地主」で、富裕な富を背景に風雅文化を身につけ「文人」として振る舞う。日常の風雅交流は村内や地域内を基本とするが、生業の流通先や通商先、村役がらみの郡域や藩域、さらには政治と需要の中核をなす城下町や三都にもひろがり、都市文人とも交流する。たんなる俳人・歌人・詩人ではすまされず、社会実態と文人活動をあわせて「村役文人」「地主文人」「豪農商文人」「豪農商村役文人」などとよび、範疇としては一括「在村文人」と呼ぶことにしている。

(4) 仲間と「座」をくむ慣習や作法は、古代の「耀歌」「歌垣」や「歌会」など以来、中世連歌をへて近世俳諧く近代句会までつづく風雅本来のものであろう。一種対等とはいえ近世では文人は富裕層で、つねに騒動や打ちこわしの対象となる。より下層との対立をはらんだ上での文人相互の対等性となる。

(5) 極端な例として狂言『連歌盗人』がある。連歌好きだが当番になっても会席が用意できないほど貧しい男が、立

派な屋敷へ盗みに入った。ついつい床の間におかれた懐紙の句をみてしまい添句を書き足したところで主人に見付かるが、出来栄えに感心した主人が酒をふるまって放免する、という筋書き。だれとでも、盗人でも、風雅好みなら意気投合、小さいながらも酒宴の場をなす。風雅交流の場、「風雅公共の場」のあり方をしめす。

(6) 「風雅公共圏」は仮説として、拙稿「手付文人と在村文人」早実研究紀要41号(二〇〇七年)および拙著2009『近世の在村文化と書物出版』吉川弘文館(二〇〇九年)で提示してみた。なお「交流」とは、人がほかの人と出会い、別の地域・組織・系統の人々と行き来し、さまざまな事物(入の行為)をやりとりすることとし、一対一の出会いも「交流」とみる。「表裏一体」とは、物事が同時にはみえないが常に緊密につながっている状態とする。「業雅一体」は風雅文化が現実の生業(農工商・職分・身分職など)と表裏一体でおこなわれる状態とする。「ほぼ郡規模」は、武州多摩郡と羽州村山郡の風雅交流をみながら設定した。拙報告「在村の書物出版と風雅公共圏(試論)―武州多摩郡と上州を中心に―」(『書物・出版と社会変容』研究会二〇一〇年五月八日)では、上州群馬県をひとつながりの風雅公共圏とみた。本論は、後者報告の冒頭部をも

とに新たな史料で考察をふかめる。

(7) 同時に『北野大茶湯之記』(天正十五(一五七)年十月一日、

『茶道古典全集』第六卷所収)は、不参加者や不参加者に赴くものの茶立ては以降「こがし」でも禁ずるとしており、本質は権威と権力による命令書というべきか。「こがし」は香煎、煎った米麦の粉末、むぎこがし。『南方録』は西山松之助校注(岩波文庫一九九五年)。

(8) 以下史料は山田正子「信濃文人山田松斎と地域人脈」(国文学研究資料館編『近世近代の地主経営と社会文化環境』名著出版二〇〇七年)所収。史料について山田氏は、行間または欄外の挿入文字や抹消文字など全文に削除修正が多く一部判読不能もある、とする。複雑な削除指示にしたがい引用する。

(9) のち来訪した柏木如亭の紹介で江戸詩人界へ出たとき、田園詩の出来映えの見事さと独立不羈の風貌や振る舞いで、英雄視されている(『家説三善存集』第(一三)巻 誤植多し)。松斎が指名されたのは、領内最大の巨大地主で代官所と親しかったからか。

(10) 身元豊かな「信友二三人」は、いずれも来遊した柏木如亭門下「晚晴吟社」の同人で、町家文人では醸造業「袋屋 山岸清左衛門」号「蘭腸」で一茶門人(門下、蔵がいま「茶記念館」)、(門下、梅堂、子梅堂も一茶)、医家文人では大俣村「藤弟来」松代藩医代行、名主文人

では近村の蓮村木鋪氏「木寿百年」などがある。逸作は号「高魯」「紅葉」で最有力同人。遺稿集『紅葉遺詩』

号「高魯」「紅葉」で最有力同人。遺稿集『紅葉遺詩』(序 尾田彌齋 山田)ものこす。晚晴吟社同人は、滞在中の如亭を訪れた大窪詩仏のすすめで『晚晴吟社詩』を刊行(寛政十一年)、菊池五山の『五山堂詩話』で絶賛され全国に知られた。「木寿」(きしき)木鋪氏と「高魯」逸作は江戸出府をすすめられ、詩仏や五山らの漢詩仲間として活動した(拙著)。

(11) 逸作は地付きの高梨氏系地侍の家系を称するが貧しく、松斎も旧地侍系だが諏訪伊那方面から初期大名に招かれたと称する外来の土着者で、地域最大の大地主富豪となった。松斎の「私式ノ小民」は、地付き者か外来者かの差異が、地域でつよく意識されていたことをしめすか。多くの蔵書はいま市指定文化財。「書籍斗八時折借用……」は地域最大の蔵書家への頼みとなる。「一銭之無心……無之」は、逸作以外からの無心が多かったことを意味する。

(12) さきの注(10)の身元豊かな「信友二三人」ら晚晴吟社同人の交流、その一人「蘭腸」ほか多くの一茶門人たちの交流、中野代官所手付文人で安積良齋門下の「大塚揆」号「素軒」通称「庚作」と松斎との風雅交流、および大塚揆が一茶の異母弟「小林弥兵衛」の願いで一茶最初の「三回忌追善句碑」(文政十二年)に追善文(漢

文)を寄せた地元との風雅交流、などをあわせ、中野代官所支配地が北信の一大風雅公共圏となしていたようすは拙稿 2007「手付文人と在村文人」(「早実研究紀要」41号二〇〇七年三月)のち拙著 2009。

- (13) 幕府御用銅を運ぶ「あかがね街道」の特権持ち平塚河岸(のち流路の変動で御島河岸へ移行)では、問屋は最多のときで十一軒。北爪清右衛門家(北清)は銅蔵だけでも十五棟あったとつたえる。北爪清一郎は号「善圃」の在村漢詩人で、「東寧江上」ほかをのこす(藤本弘明『上毛の近世漢詩人』一九九七年私家版)。地域頂点の河岸問屋文人といえる。

- (14) なお井上定幸「上州近世における在村俳人たちの学習活動―栗庵似鳩の寛政七年「日記」から―」(群馬文化二七、一九二〇〇九年)は、似鳩門人の「連」分布図を上州側だけしめすが、武州にも「久々字連」「藤ノ木河岸連」や「武丘部」「武本庄」「武深谷」「武牧西」「武中瀬」があり、似鳩門人は利根川の南北にわたることは明らかである。しかし似鳩追善『ゆきのかね』は上州門人が中心だったのか、武州参加者は山王堂河岸のみ。全体として松谷門人は武州に多く、似鳩門人は上州に多いようにみえる。なお「藤ノ木河岸」はもと神流川右岸の武州児玉郡毘沙吐村小字藤ノ木。のち弘化三年大水害で流失、河岸問屋は上州側の新町河岸

へ移り小字のみのころという(日本歴史地名大系)。

- (15) 上巻に「芭蕉翁行脚之掟」や「雪まるげの文」(曾良貞筆臨書)、「深川八貧」ほか初期蕉風の史料を収め、文学史上でも貴重視される。

- (16) 以上分布図もふくめ拙論「商品と風雅と河岸の一体交流」(『地方史研究』五四・四、二〇〇四年)。分布図○印は、平塚河岸向けの出荷村名(群馬県史)、そのうち『諸家人名録』に文人が記載される村、上州蓮沼村の俳書『有無の日集』、砥沢村の『蟬之声』、信州上塩尻村の俳書『雪の薄』、同『座摩神社奉額句合』の各入集者の村名、「上塩尻蚕種商仲間定宿」の村名をあわせ、村名と人数は省き地点のみをしめた。

- (17) 「思永」は、下道寺村の医師「多賀谷静斎」で名脩、俳号「文木館思永」、似鳩とは隣村同士で朝暮往来して俳諧したとされる(藤本弘明『上毛の近世漢詩人』)。

- (18) 「大野景山」の大井村は東京の南の郊外で、筆者自宅から徒歩十二三分。最寄り天祖神社や鹿島神社に句碑がのこる。下総出の師「社格斎山奴」の「社格斎」を嗣ぎ、品川鮫洲の泊船寺を中心に活動した。房総行川の半場里丸編『杉間集』(半場里丸編、文政九年序)の集句屈所に「池上通大井村長屋門／大野五蔵／社格斎」(『夷隅の俳諧』夷、関町一九九七年)、多摩川向こうの

影向寺(山崎市西
前区野川)の芭蕉句碑「春の夜はさくらに明てしまひ

けり」の碑陰に「天保六年乙未季秋 杜格齋景山書」、信

濃姥捨山長楽寺に句碑「青空を田島のいろや夕日影／景

山三千香(みちかか
ゆきうね)」があり、弟子筋とされる雪邦居蓑一編『雪溶

集』巻頭句に「善光寺／此ひかり四時たがはじ月の影／

杜格齋景山ミち香」がみえる(嘉三年集立長野図書館蔵感徳院文
庫より、マイク口判略不能部也)。屋敷の

桜並木が有名で、鷹狩りの將軍吉宗が一枝を所望したと

伝える。一枚刷り『南浦桜案内』も刊行する(天井町誌
一九三三年)。「曉

鳥庵」とも号したという。『新編武蔵風土記稿』荏原郡

品川領大井村の項は、祖は「堀越御所政知」の旧臣とし

ながら、「彼が宅地の前に桜一株あり、享保年中御放鷹

のおりからこの木の花を御賞誉ありして、後は上意桜

と名付て謹で保護なせり」とする(後述)。

(19) 「斗藪」は「山林斗藪」で山野での仏教修行の意。『斗藪

雜記』は「俳人逸話紀行集」(博文館
一九一五年)による。解題は「知

人の紹介を□つゝ行脚せし有様のいと委らに見ゆるを面

白しとす」とその具体性く現実性を指摘、矢羽勝幸『江

戸時代の信濃紀行集』(信濃毎日新聞
社一九八四年)も、「もつぱら俳人の消

息に注がれ、道々の風景などにはほとんど無関心」で「江

戸後期らしい現実的精神で統一」されているとする。こ

こでは即物的な描写ゆえによくみえてくる風雅交流の実

態をとりあげる。信濃の旅は隠居後の天保四年六十四歳

の時のもので、吉野をめざしたか。

(20) 『白齋と白虎』金井清敏二〇〇五年私家版による。文人

活動としての富は在方商もあわせたものと考えられ、高

十石は中堅だが階層分解すむ近世末期では、在方商も

あわせ上層農とみるべきか。小林一茶とも親交深かった

という。

(21) こうした「出会えなかつた」風雅交流を残念がる事例

は、若きころの菅茶山にもみえる。房総香取神宮の参

宮河岸の津宮村の名主文人「清淵」窪木氏の庵を横を

通りながら見逃して訪れなかつたが、のち測量の旅の

伊能忠敬から清淵の書『鄭注孝経』を贈られて気付き、

大いに残念がつてその顛末を語る跋文を忠敬に託して

いる。『鄭注孝経』第二版に菅茶山跋がみえる(拙著)。

(22) 大原幽学は、「江戸後期の農村指導者。諸国を遍歴、神

・儒・仏に通達、心学の影響をも受けて、下総香取郡長

部村で性理の学を教授。農村救済のため、組織した先祖

株組合は農業協同組合運動の先駆。幕府の抑圧を受け自

刃」と概略されるが(拙著)、研究書として明治四四年『大

原幽学』(千葉県内務部編)、大正六年『幽学全書』(田

テル)、同一五年『大原幽学』(藤森成吉)、昭和一八年『大原幽学全集』(千葉県教育会のうち昭和四七年複製版)、昭和三八年『大原幽学』(中井信彦、人物叢書)、昭和五六年『大原幽学とその周辺』(木村基編)ほか、農村運動の地元干潟町教委や大原幽学記念館の刊行物などがつづく。多くは性学思想と農村改良運動を軸とする。遊歴文人としては、衣笠安喜『近世儒学思想史の研究・第一章 文人の思想』(一九七六年)が「その遊歴は、和歌・俳句・易学(売卜)をもって地方の地主や豪農・豪商を訪ね歩く遊俳に似た生活であつたらしい」としながら、最終的には「社会教化と農業指導という泥くさい世界に身をのり入れていく」とする。ここでは幽学の遊歴における人との出会いと交流の仕方にしぼる。出自についてはのち、房総門人連が尾張藩士大道寺家の次男とつたえるが、確証はないとされる(中井信彦、前掲書)。

(23) 伊吹山松尾寺は伊吹山中腹で白鳳年間の建立とつたえるが戦国期に焼失、元禄期に黄檗宗の隠元門弟「潮音禪師」の開山で再興された名刹。幽学の書き物は、遊歴日記の『口まめ草』(文政九々天保一三年)、『道の記』(天保四々一三年)、道徳学の『微味幽玄考』『性学趣意』、暦学の『暦術口伝』、農村改良の『先祖株惣締高取調帳』、児

童教育の『子供大会日記抄』、書簡集」ほか多数がこのころ(大原幽学全集、昭和三八年)。以下の遊歴記録は全集の『口まめ草』による。

(24) この間数年の遊歴と出会いも興味ふかく、とくに幽学の風雅論がよみとれるが省略する。「道の談話」は以下「道話」と略称する。中井前掲書はこの「道の談話始り」にはふれず、翌文政十三年三月の松尾寺再訪で「社会運動の実践」を決意したとするが、ここで「道の談話」を説きはじめたからこそ翌年に松尾寺を再訪、師の説得で本格的に決意したことになろう。

(25) 「路銀逼迫」はしばしばみえるが、逗留中に何らか交流があれば、揮毫や詩歌句会の指導などの礼金、出立時の賤別金などが収入となり、ふたたび遊歴をつづけられたと考えられる。

(26) 「道の談話」「稽古」「改心」の実態は明記されない。のち天保七々十一年房総での道を説く旅の記録『性学日記』でも、「性学談義」「性学修行」「昼夜稽古」「改心」とは記すが、具体的な仕法の仕方や手順はみえない。幽学にとつて、改めて明記する必要のない当然当たり前の手法だったか。「一種自己鍛錬の仕法」は、いまでいう一種集団カウンセリング風な、「問答療法」とでも呼ぶべき仕法か。

(27) 農村仕法「先祖株」は世界初の農業協同組合的組織とさ

れる。欧米の最も早いところで一八六〇年代から。こうした後半生は、さきの「下総道友宛書置」で、「時に僕十八歳にして漂泊之身と成り、愈師之伝を守り、乍^二不学^一、中庸、孝経、三書之微味幽玄を探り、学之為に国々の先生方に義論を乞ひ願ひ、性理を明らかにして以来、弥人を導く事を念とし、淫^(マヤ)犯^(マヤ)飲食、遊樂之念去り、己に勤て以て人を導く事を得、不孝子も不孝子に至らしむる無、年々歳々多に至る。…然^レ尠^レ…、今後に至^レ而^レ尠^レ々に元之不孝不正に帰者追々出来を見聞に不^レ忍、致^二自殺^一／安政五年三月八日／大原幽学」とする。自刃は、教えを忘れ元にもどる者多きを諷めるためとも読みとれる。

(28) ほかに男女門人十数人それぞれを論す「遺書」がのこる。一九七〇年代、ある地域で農事日記をのこす名主文人のことをたずねたら、かるく「ああ旦那衆のね…」といなされたことがある。いわゆる在村文人なるものが、特別視^レ嘲笑視^レされていたであろうことを痛感した記憶である。

(29) ^{蜘蛛}「くも」に教えられた吉備大臣は、唐で幽閉され謎をかけられた野馬台詩の読み順を蜘蛛に教えられたとの故事だが、こうした知識が地方まで周知されていたことになる。近世末期の文化成熟度をしめすか。

(30) のち天保七年、房総門人連五人との紀行文『陸奥つれぐ^レ草』も、「ハヽヽヽ」を連発する笑いと親睦の旅であつた。

(31) 亭主の号は「文吾」、上諏訪温泉の宿「牡丹屋孫四郎」

^(天羽勝幸『長野県人名辞典』)。風雅の場の伸縮自在性は、省いた畿内遊歴

の和歌山でもあつた。菜の花の句作を一人楽しんでいたら見知らぬ侍たち二十数人の酒宴にさそわれ、以後ほぼ十日間を面々の家ですごしている。和歌山侍の日常の楽しみの方は、風雅さえあればだれにでも開かれた場、風雅公共圏だつたことをよくしめす。

(32) ここでいう「表の公的な実名による村役や生業の現実世界」は、平川新「郡中」公共圏の形成―郡中議定と権力―^(日本史研究五一号)、のいう羽州村山地域の「地域公共圏」に近いが、その中核をなす郡中惣代や大庄屋ら村役のほとんどが、ここでいう「在村文人」のはずで(注⑥参照)、風雅交流での風雅信用と地域政治の村役信用が表裏一体だつたすれば、いわゆる「地域公共圏」は、ここでいう「風雅公共圏」と表裏一体でかさなつていると考えられる(村山地域の在村文の村。役名もくめ拙著『註』)。

(33) 明治十年代初頭、上州碓氷郡の在村で自然発生的に工夫された農業協同組合、組合製糸「碓氷社」の資本制下で

のあり方については拙著2001。